

PHD LETTER

48

PEACE・HEALTH & HUMAN DEVELOPMENT

1993・9

- ビルマ/カンボジアを訪ねて……………2P
- 研修生レポート……………4・5P

PHD運動とは1962年より約20年間、ネパール、東南アジアを中心とした発展途上国で医療活動に従事した岩村昇博士の提唱による国際社会福祉運動です。これまで自分のためだけに使っていた時間、技能、財などの10パーセントをささげて、平和づくり(Peace)健康づくり(Health)を担う人材をつくる(Human Development)運動を世界中にひろめることを目的として、1981年からはじまりました。

発行:財団法人PHD協会
編集人:草地賢一
住所:〒650神戸市中央区元町通5-4-3 元町アーバンライフ202
TEL(078)351-4892 FAX(078)351-4867
郵便振替:神戸1-29688 財団法人ピー・エイチ・ディー協会
定価:100円



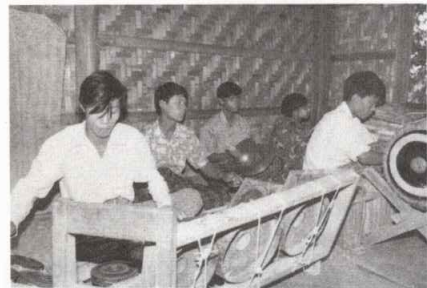
ブノンベン郊外の漁村にて。

カンボジアを貫く大河メコンは、すべてのものの母なる河。
ここで育まれる子供たちは、みんないきいきしている。
新しい時代をむかえているカンボジア。
次代を担う世代にも大きな^{のぞ}希みを託したい。
——それは友情とわかちあい。

草の根の人々を訪ねて

研修を継続することの意味

マンダレー市から車で1時間弱南東に走ると、ウィン君の村北タダインシェに着きます。今年4月にビルマ(ミャンマー)からの最初の研修生として彼は予定通りタダインシェのシンプルな生活に戻っていました。二番目の息子が彼に常にまとわりついているのが印象的でした。相変わらずきびしい軍政が続いているビルマでは、町でも村でも人びとがいつの間にか深い沈黙を守り、相互の人間関係が暖かさを失っていつているようです。ウィン君は村の指導者(彼らは政府、軍に近い人びとです)からは獣医としては重宝がられながらもまだまだ警戒もされながら、明るく振舞っています。村に帰って再開した無料の私塾にはこの指導者の子弟も引き受け、村から大学へ進む人材を養成しています。また村の青年のために彼が作った「伝統音楽演奏グループ」は段々腕を上げてきています。



ウィンさんの作った村の青年による伝統音楽演奏グループ

村に泊まることは許されないので、私は毎日マンダレーから村に通いつめました。その中でもう少し見えてきた農民の苦しみは、次のようなものでした。

英国統治時代に作られた農業用水路の

水の分配が非常に不安定かつ不公平であること。農民の稲作のコストが突出し米による収入は極端にアンバランスであること。具体的には次のような数字です。

収入	1ヘクタール200kgのみが得られるとしてその半分を政府に売り渡さねばならない。この収入は7,500チャット(K)半分は一般に売ってもよい。この収入は19,000K
合計	26,000K
支出	水代(ポンプ借り上げ) 1,500K
	牛代(田起こし用) 800K
	もみ 3,200K
	労賃(苗引き、田植など) 8,800K
	肥料(2回施肥) 48,000K
合計	62,300K
差引	-36,300K

このマイナス分は村の裕福な人から借りそれは年々増え続けていく。

この現実の中でウィン君は少しずつ生活向上に取り組んでいくとのこと。本当に政治、経済その他あらゆるところで前途多難を思わずにはいられません。その中で唯一の救いは、村の有力者がト



村の人たちと話し合うウィンさん(右から2人目)

ウンティン君に続いてトウトウン君をPHDが選り研修が継続されることに関心と感謝を寄せ始めたことです。

カンボジアはビルマに勝るとも劣らない混乱と困難の状況が続いています。スム君のお連れ合いは二人の子供をかかえ激しいインフレに苦しみながら必死で留守を守っていました。幸いスム君のセンターのスタッフや彼女の教えている小学校の同僚らが周遊で励ましています。

ノップ君の村チョンボクも少しずつその波が押し寄せているようでした。政府は今大きな機構改革を始めているようで、聞いたところによると18の省庁が作られそれに2人ずつの大臣が第一党と第二党から割り振られるようです。さらに心配されることは各国政府の援助案件が多くありこのビジネスを巡ってすでにプノンペンのある通りの名前は「商社通り」と名付けられる程多くの援助ビジネスがひしめいています。

現地のNGOの最大の心配は79年以来進めてきた民衆参加型の開発協力が大量のモノ、カネによるパラマキ型の援助によって援助依存症が蔓延することのようです。

特に農業援助に農薬と化学肥料の供与があるために人のみならず農地を始めとする生態がこの病気(援助依存症)に陥ることを私達も激しく恐れかつ心配しながらプノンペンを立ちました。

総主事 草地賢一

明の調査をしているところであるが、本土から行ったメンバーの印象では、やけに自動販売機が多い。観光客を相手の商売、人手がない。自動販売機が置かれる。島民もつい甘いジュースで喉を潤している。自分の体重をコントロール出来ない住民の多い国は貧しい。海の水は美しい。しかしあちこちに、「空き缶」がみられる。地元の人に、「空き缶の処理が大変ですわ」といったら、「それよりも、発泡スチロールが大変です。あの海岸の白い砂は砂ではないのですよ。発泡スチロールなんです」と。「白砂青松」という言葉があるが、松は枯れ、砂は偽物という隠岐は寂しい。この保健所管内は、海士町、西ノ島町、知夫村、の三町村である。昭和40年には、12,516人が平成4年には

8,062人になった。65歳以上の高齢者人口は29.3%に達している。このお年寄りをどのように支援するかが行政の課題となっている。若者の都市への流出ははげしい。島では「家」をみるために、独身でいる40歳の男性がめだつという。一人暮らしも増えている。家庭内介護力は著しく落ちている。デンマーク並みの社会的介護がないと生きていけない時代が目前に迫っている。このように、隠岐でも「環境」が壊れている。自然環境も、社会環境も壊れている。都市では合計特殊出生率が1.20という。日本全体でも1.50という子供生み育てるという環境が整っていない。日本は「豊かな国」といわれているが、なにが豊かなのだろうか。

関 龍太郎

第1回 ドイツ、タイ 国際協力研修旅行

1993. 6. 13~7. 2

このツアーは普段行っている研修生を訪ねるものとは趣を異にしていますが、「開発教育」の実践されているドイツと援助される側の現場である北タイという組合わせて行われました。

国際協力を行う主体は、行政、教育、宗教、報道などやNGOのような民間団体と色々ありますが、それよりもひとりひとりが一市民としての意識を持ってかかわっていることが、目立ちました。

ドイツ、タイ旅行から

赤松豊永

ドイツの「開発教育」は人間教育である宗教教育で重要な課題として行われている。南北問題、環境問題として、まさに生き方が問われているという認識だろう。事柄の性格を的確に捕らえていると思う。

教育の成果だろう、一般的にドイツでは南北問題や環境問題についての問題性の認識は高いようだ。しかしながら、アフリカ人の政治亡命者(労働者?)を教会に招いての集会を呼びかけるとほとんどの教会員は反対したという話も聞いた。頭では分かっている、自分の問題になるということは難しいようだ。ドイツ人も悩みながら聞いていると知らされた。

ドイツの進んだ教育や制度、またそれらによってもたらされる「高い、意識に驚くよりも、課題にこころを組んでいる姿勢の方にこそ学びたいと思った。

タイのカレン族の村、ムシキー村にはスウェーデンのODAによる立派な学校が建っている。それを悪いことだと言うつもりはない、しかし本当にこれだけのだろうかという疑問を持ってしまう。お金や物を貰うよりも自立することを目指す現地のNGOのリーダーが、金を集められない無能な指導者として解任されようとしていると聞いた。また中には指導者という立場を利用して私腹を肥やす人もいると聞いた。

今回の旅行で気になった言葉に「正義」

がある。「世界に平和と正義をうちたてる」とか「ただしいことを行う」というのだが、意志の押しつけになる場合が多いのではないだろうか。想定された正義というイメージを最初から持っているような気がするの偏見だろうか。「共に」といながら「北」のやり方を押しつけてしまうことを怖れる。

人と人との関係の大切さを改めて考えさせられた旅だった。アフリカの人々との出会いからドイツがアフリカを犠牲にして成り立っていることを問われ、応えていこうとするなかから改めて身近な差別問題などが課題になったという話や、PHDとカレンの人々との関係から、人と人を隔てるのは何よりも「傲慢さ」だと再確認させられた。そして事実に出会うということのみが、思い込みや決めつけという傲慢を破ることができる。

ドイツにおけるキリスト教会の位置

原野和雄

今回のPHD研修旅行に於て、ドイツではキリスト教会および教会関係の機関に触れる機会がかなり多かった。それは、案内役の私がかつてドイツの教会で働いていたという理由からだけではない。それは、かの地の市民運動や社会活動の分野において教会のしめる位置が大きいという事情による(中略)。

しかし、教会は行政の下請けをしているだけではない。社会に対する責任の表



「世界のためのパン(ドイツのNGO)」1992-93年のテーマ 国際先住民族年に向けて。

明として、教会が機関として、また、会員の自主的行為として様々な働きが生まれてくる。平和・軍縮、環境保護、人権、国際協力等々。NGOとしての大きな機関から個人レベルの市民運動まで広い幅を持っている。

今回の旅行中「Subsidiaritätsprinzip」という言葉を各地で繰り返し聞いた。日本語訳のむずかしい言葉であるが、一応「自立原則」と訳せよう。意味する内容は、「小さな単位で解決できることはそこで始末する」、即ち、「小さな単位で行うことに、大きな力は干渉しない」ということである。教会の世界ではかなり古くから用いられた概念である。つまり、各個教会で解決できることには地区教会は口出ししない、地区教会が解決できることには教会本部は口出ししないという意味である。近代においてこれが社会活動の原則にもあてはめられた。キリスト教であるか否かにかかわらず、活動する団体の、自立に対する責任と権利を保証する原則である。公的機関は活動に対して経済的援助をしても、その活動を支配することはできないことが原則となっている。これはまたなによりも社会活動にたいして「国家」の全体主義的な支配を排除しようという姿勢を表す。先のヒトラーの全体主義的政治に対する反省から、特に戦後強まっている意識である。

とつづいたが、見て回るだけなら観光旅行と同じ。私たちのできることを形にし、彼らに返していくことが求められていると感じた。

「伝わる彼らの信念や情熱」

森本陽子

ツアーに参加した動機はフィリピンの現状とNGOの活動を実際に見たかった事と、そこから私なりにできる南北問題解決の糸口を見つけたかったからだ。

驚いたのは、貧しくとも笑顔を忘れない

第4回

保育者の為の第3世界スタディーツアー報告

1993. 7. 26~8. 2

第4回目の今回はフィリピンの都市部のスラム、ネグロスのオリガオ村を訪ね、人々の生活の現状や保育の現場から学ぶ旅を、保母3名を含む8名で行いました。

「現状を知り、できることは…」

加島督枝

二日間の滞在で、デイケアセンターや元研修生の家などを回った。たった1人で60人以上の子供を受け持ち、栄養状態の改善や読み書き、計算などの勉強、礼

儀作法などを教えるデイケアセンターの先生たちの姿は印象的だった。物がなかりに廃物などを利用して作った遊具が並ぶ室内は、先生の熱意と愛情があふれているようだった。

「現状を知る」のがツアーの目的のひ

これからが勝負！11期生

研修生レポート

ようやく軌道に乗り、研修に充実した毎日を送る11期生。来日の遅れから、日本語にはそれぞれが苦労していますが、少しずつ進歩が見えはじめています。以下、それぞれの研修生の状況をお知らせします。また、11期生の年間研修計画を表にまとめてみました。前半期研修中の研修生の様子としてご一読下さい。

11期生年間研修計画

月	研修内容
7	前半期研修
8	
9	
10	後半期研修Ⅰ
11	東日本研修旅行
12	
1	後半期研修Ⅱ
2	西日本研修旅行
	研修整理
3	韓国・フィリピン比較研修(地域組織化)を経て帰国



ムームーさんの帰国をお楽しみに。ムームーさんの保育園の母親会。

堆肥づくりに関心 トゥンティンさん(ビルマ)

牛尾武博宅(兵庫・市川町)→草生塾参加→岡岡史郎宅(兵庫・福岡町)→安達一博宅(兵庫・豊岡市)

昨年の10期生ティンアンウィンさんの一番弟子として期待のかかるトゥンティンさんは、大変活発な青年で農業はもちろんのこと、日本語の吸収も早く、研修先の方々も驚いています。別表のように現在は前半期研修の締めくくりの時期にあります。稲作、養鶏、堆肥づくり、野菜。それぞれ専門家の生産者と共に学んでいます。

トゥンティンさんとの話の中で、理解が深まりつつあるのは、堆肥と鶏の飼料配合。両者とも生産者により少しずつ手法が異なってくるので、当初は難しかったようですが、広岡さん宅での研修の帰り道、ビルマ語でびっしり書かれたノートを示しながら、鶏の飼料配合を細かく説明し、その成果がうかがえました。また堆肥については、トゥンティンさんの村ではほとんど使われていないことから、今後も更に深く学んでいきたいとのこと。更に有機農業を実践していくにあたり不可欠な産消提携運動についても関心を示しています。昨年のティンアンウィンさんも産消提携運動に関心をもち、現在ビルマで取り組みを考えていることから、今後の彼の主要なテーマになっていくことが予想されます。

また、研修先では農業研修のみならず、地域の小学校や勉強会に参加し、多くの方々と

交流しお互いの生活環境や問題などを分かち合うことができました。

つい先日は、ビルマに残した奥さんが出産。2人の息子の父親となり最高に幸せなトゥンティンさんに、これからの後期研修に向け更なる期待が寄せられます。

衛生の視点から保育を学ぶ ムームーさん(ビルマ)

波賀みどり保育所・波賀幼稚園/田中五郎宅(兵庫・波賀町)→草生塾参加→瀬加保育園/牛尾武博宅(兵庫・市川町)

ビルマの村で保育さんとして数年のキャリアを持つムームーさんは、日本の子供たちの生活環境や健康状態をいろいろ観察しながら、保育園での研修を実施しています。研修先の保育さんたちの話を聞くと、やはりムームーさんは子供を扱うことに慣れ、言葉が上手に通じ合わなくとも努力して溶け込んでいこうとする姿勢に意欲がうかがえるとのこと。子供たちからも「ムー先生」と慕われています。

さて、ムームーさんは現在「保育」を学ぶにあたり、主に衛生の視点から観察しています。というのは、前号でお知らせしたように、ムームーさんが勤務する保育園では、園児は自ら手を洗う習慣が無く、それが主な原因となり下痢や皮膚病が多いことがあるからです。園児にその習慣がないということは、結局親にその認識がないこととなります。とりあえず、今日の日本では日常生活の上での衛生的配慮はかなり徹底されていることから、保育園におけるこの指導、また啓発方法について理解を深めていきます。

後半期研修に向けて、「保育」とは何なのか、村の生活改善を考えよう位置づけられるべき

か、農業が生命の源であれば、「保育」とは、子供を中心にその食糧から効率よく栄養を摂取するためにどう調理を工夫するのか、また衛生面ではどう対処していくのか等々、「保育」が領域とする範囲は広く、いずれにしても、村の生活改善を重要な取り組みの方法として捉えていく必要があります。今後は、保健所や保健センターなどの保健関係の専門機関での研修も取り入れ学んでいきます。

充実した養鶏の学び スム・ソコムさん(カンボジア)

青位真一郎宅(兵庫・八千代町)→草生塾参加→渡辺省悟宅(兵庫・丹南町)→渋谷富壽男宅(兵庫・神戸市)

来日当初は、国連カンボジア暫定統治機構(UNTAC)による総選挙前で、かなりの不

安感が見えていましたが、現在は落ち着きを取り戻し、元気に研修に取り組んでいます。これまでの研修を経て現在最も関心のあるテーマは養鶏。青位さん、渡辺さんとともに平飼いで養鶏をしていることから、充実した内容で研修を行うことができました。現時点では養鶏の経営サイクルを一通り観察し、概略を掴んだところですが、今後の研修では、飼料配合、ワクチン、鶏ふんの堆肥への活用等、専門的に学びたいとの意欲を見せています。

また、現在問題となっているカンボジアに対する農薬・化学肥料援助についてですが、ソコムさん自身、農薬・化学肥料多投による人体そして土地への悪影響、経済的な問題等について本格的に学んだ経験が少ないようなので、今後の研修ではこの点も押さえつつ学んでいきます。

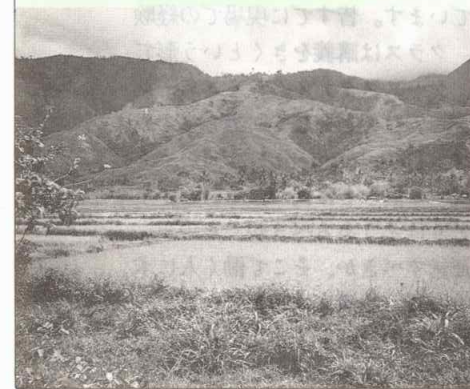


カンボジアの水田とビルマの干し草切り。農作業風景のひとコマです。日本で何を学ぶのか。試行錯誤しながら研修を進めています。

短期研修生

オリンピア・トレドさん (フィリピン)

前号でご紹介いたしましたオリンピアさんが8月15日に来日。これから約2ヵ月間の日程で栄養・衛生を中心に学んでいきます。以下、研修スケジュールと出身地域についてご紹介いたします。



尾崎食品株式会社(兵庫・神戸市)→薬害・医療被害情報センター(兵庫・神戸市)→鳥取県根雨保健所(鳥取・日野郡)→信長か子氏講義→明石協同歯科(兵庫・明石市)

オリンピアさんが生活し、ヘルスワーカーとして活躍するブグナン村は、ルソン島中部に位置するヌエバエシーハ州にある農村。同州の州都カバナトゥアンからはジブニー(バス)で約3時間の距離にあります。村は人口約800人、約180世帯で構成され、ほとんどが農業に従事していますが他に大工、教師、ジブニー運転手等の職種があります。また、違法ではありますが資金力のある者は林業を営んでいます。農民の平均収入は日給で約30ペソ(約150円)です。この村の問題として農業と栄養・衛生を概観します。農業上での問題で深刻なのは「水」の問題。近隣の山には森林の違法伐採のため、木がほとんどなく乾期の水不足、雨期の洪水が極端な形でおこり、村人の経済生活に影響を与えています。同時に雨期には感染症(コ

ブグナン村から見た山、木がない。

取り組む有機農法 ノップ・ヴァナさん(カンボジア)

大森昌也宅(兵庫・和田山町)→草生塾参加→中野宗嗣宅(兵庫・春日町)→吉田吉彦宅(兵庫・氷上町)

今年の研修生の中では、今のところ日本語の修得が遅れている方ですが、現在2カ所での研修を終え、徐々にではありますがなんとか意思を日本語で伝えようとする姿勢が見られるようになり、今後が期待されるどころです。

ヴァナさんが取り組んでいきたい主なテーマは稲作を中心とした有機農法。トンレサップ湖を源とする水の供給と豊かな土地。水田には幾種もの魚が生息し、不可欠な栄養素であるタンパク質はほとんどがまかなえる土地柄で「百姓」をするヴァナさんにとっては、これまで行われてきた伝統的農法を、有機農業として位置づけた上での取り組みが今後の課題とされています。お兄さんの存在のソコムさんとも研修について情報交換で、より自らの研修テーマを明確にしながら後半期研修に臨んでいきます。

チャラムサック ・カツティヤさん

(32歳・男性)
タイ、チェンマイ市
パヤップ大学研究員



前号でご紹介いたしましたタニット・クンカチョンバンさんが諸事情により来日することができなくなったため、同じ大学の研究員チャラムサックさんが研修生として来日することになりました。

研修内容は、タニットさんとほぼ同様に、帰国した研修生の村とチェンマイ市との間で産消提携運動を実践する上で必要な農作物の生産から流通までの過程を、日本の有機農業生産者と消費者グループの双方の立場から学びます。

現在の予定では、9月末来日で約2ヵ月間研修を実施します。通訳を交え、タイ語、英語で学びます。

〈帰国研修生・短信〉

- ワラヤさん(6期生、タイ) 10月ごろ子供が生まれます。
- トニーさん(7期生、バブア・ニューギニア) 4月に奥さんが2番目の子供を産みました。
- ドミーさん(7期生、フィリピン) ネグロス西州農業短科大学を卒業。今新しいグループKRISMAを作りました。
- ネストールさん(8期生、フィリピン) 2人目の子供ができました女の子です。

い人々と私達を歓迎してくれる心の豊かさだ。どこへ行っても精一杯のもてなしをしてくれる。また、彼らの為に活動している人々の姿を見てみると、彼らの信念や情熱がひとと伝わってくる。何か彼らを支えているのだろうと思う。

「人間として教えられる」

松波道子

地域のために自分の仕事や生活をかかえながらボランティアとして働いておられる方々を見て心を動かされました。責任をもって地域のグループづくりに関わったり中には、地域に入り、生活を共にしようとされる方もおられました。

保母として云々ではなく、現実から自分のやるべきことをみつめやりたいことをしっかりもって未来のために生きている男性・女性たちを見て人間として教えられることが数多くありました。

物事を済ませ、快適に過ごすのが本当の豊かな生活だろうか。自己中心主義を個人主義と履き違えて主張し、自分だけの得を我先にと得ようとするのが本当の幸せの追求だろうか。

発展国と自称する日本は人と人との生の関わり合いや、ものを大切に作る気持ち、自然の恩恵への敬意などに関する人間として最も基本的で重要な心の問題の面では発展衰退国と言えないのではないだろうか。



オリンガオ村の新しいデイケアセンターで。

第9回草の根生活塾

1993. 7. 21~7. 25

好評の草生塾は今年で9回目を迎え農業体験、地元篠山町の人々との交流、研修生との交流と盛りだくさんの内容で行いました。

今年は、例年より子供たちの参加が少なく準備段階では心配しましたが、フタを開けてみれば何のその。参加した10名の子供たちは一人で数人分のにぎやかさ。ボランティアリーダーがまとめるのに一苦労。しかし、その分学校での勉強や騒々しい町での生活から解放され、思い切り羽をのばすことができたことと思います。

さて、草生塾の目的である「農業体験を通じて『農』と『食』を考える」、「研修生との交流からアジアを知る」という大きく分けて2つの視点から振り返ってみます。

まず農業体験については、今年は主に豚、牛、鶏を飼育している農家でお世話になって、フン掃除、エサやり、除草から豚の去勢などを行いました。子供にとっては少し残酷なとは思われるでしょうが、私たちが日常食している肉がこのような過程を経て食卓にあがっていることを考えると逃げてばかりはいられません。当の子供たちは何の抵抗もなく、観察していたようです。

研修生との交流、スライドによる村の生活紹介、アジアの料理、ゲームなど多様な視点から深めました。やはり、欧米についてはよく知っていても研修生の国はあまり知られていません。とりあえず国名と位置は覚えたことでしょう。これからの勉強の中で、今回の学習を思い出してもらえればと思っています。

4泊5日という限られた時間の中で、どれだけのことを感じ、理解できたかは計り知れませんが、全員最後まで活発に関わってくれました。参加者の今後の生活の中で、何らかの変化があることを期待しています。

最後に名前を挙げることはできませんが、滞在農家の皆様、篠山町の皆様他多くの方々のご協力により今年も無事に終えることができました。ありがとうございました。

「価値観の見直しを」

氏家正美

自分の価値観を見直す為にも全く違う状況の中で生活している子ども達と出逢い子どもにとって本当に大切なものは何かを再度考え直そうとこのツアーに参加しました。どんな状況にあっても遊び、楽しんでしまうのが子どもで、ゴミ山をあさる仕事でさえも楽しんでいるようでした。また無報酬で苛酷な勤務状態にありながら、子ども達の為に努力している現地の先生方を見てその情熱に頭の下がる思いでした。

「本当の幸せとは…」

持原愛子

お金を出さずすれば何でも簡単に手に入り、出来るだけ楽に時間をかけずに

「私が変われば世界も変わる」

峰谷知子

オリンガオの人々の暮らしは貧しかった。でも、その「貧しい」とは何を基準に言うのだろう。「テレビがないこと?」「ガスがないこと?」。そうじゃない。相手の貧しさばかりを測るのでは、いつまでもたっても豊かな国から来たお客さんだ。そう、彼らの貧しさはいつも私達の豊かさの上に成り立っているのだ。

だから私はアジアの人々の暮らしを変える前に、自分自身の生活を見つめ直したい。それに日本にだって、私達は見ようとしなくても、アジアと同じ現実が山積みになっているのだ。今、私はここでフィリピンで感じた暖かさと同じものを感じながら確信している。「私が変われば世界も変わる」と。

団体に身を置いての現場での研修という予定で4月中旬日本を出ました。

研修の第一幕はロンドンから北へ2時間半のバーミンガムにあるセリーオーク大学のDevelopment Studies Courseに加わり、開発・援助に携わる者を対象のトレーニングを受けるとともに、英国および他の欧州の国際理解協力団体を訪ねその活動から学び、また日本では手に入りやすい資料を集めることが目的の滞在です。行きなれたアジアの村とは違う初めての欧州、やっぱり日本語じゃなかった英語でのやりとりにとまどいながらも3カ月半貴重な経験をさせてもらっています。セリーオークのクラスは生徒24

人。エチオピア、タンザニア、ザンビア、ナイジェリア、南ア、インド、アフガニスタン、バングラデシュ、タイなどで開発援助に取り組むワーカーの人たちと共に学んでいます。皆すでに現場での経験があり、クラスは講義をきくという形ではなく、ケーススタディ、シミュレーション、ゲームなどを通じて討議ですめられます。Developmentとは何か、それを実現する働きとは何か、それをすすめる段どりはどうあるべきか、その組織はどう運営すべきか、そこで働く人に求められる資質、心構えは何かというテーマにそれぞれの経験をふまえて話し合いがすすみます。先生によって正解が示さ

れるのではなく、共に考える過程が大切にされます。

最も基本的な開発とは何かというテーマでは、経済発展の達成が目的であったかつてのものから、今はその対象地域の人々が自らの必要に目覚め、それを得ていく過程に参加していくことを開発ととらえます。そこで開発にかかわる者の役割は、いかに人々に気づきのキッカケをつくり、人々に考え、コトを決めすすめていく過程にまきこんでいくことにあります。外の人間が外の価値観で、金やモノを持ち込み、地域の人々に指示をだし、従わせる方式ではないのです。この点から、招いた研修生が軸となって村の人々がすすめる村づくりを支援するPHDのアプローチは、大筋としてイイ線いって

いると思いました。このクラスでの学びはPHDの活動を客観的に見直すのに大いに参考になり、また研修プログラム、フォローアップ実施に実践的に役立つ内容を含んでいます。日本国内ではこの種の研修は機会が少ないだけに貴重です。

こちらの国際協力団体も時間がとれる限り訪ねていますが、何せ、土・日休み、夏休みたっぷりどこかとはエライ違い。そこで働く人には好ましい環境ですが、一般の人が訪ねよう、かかわろうとした時、募金以外の活動ではかかわりにくいのも事実です。実際、クラスが休みの土・日には訪ねられないわけです。今のPHDは6人の職員プラスボランティアメンバーで研修、開発教育、募金、オルタナティブ(もうひとつの)な貿易や旅行

PHD NEWS

〈会費・ご寄附寄託状況〉

1993年 5月	83件	960,277円
6月	100件	2,420,263円
7月	572件	4,652,159円
	755件	8,032,699円

前号でお願いいたしました会員拡大キャンペーンに対し、新しい方のご紹介などたくさんの方々にご協力いただきありがとうございました。尚、キャンペーンは継続いたしておりますので、更なるご支援をよろしく願います。

〈新しい理事に藤本氏〉

5月13日開催の第29回理事会において遠藤敦雅氏が退任し、代わって津田貞之氏が就任しましたが、7月5日開催の第30回理事会で津田氏が退任、代わって藤本和弘氏が就任しました。

〈研修生との交わり

東日本研修旅行)

昨年は2組に分かれて行われた東日本研修旅行、今年は1コースを約2週間かけて回り、各地でご支援下さっている方々との交流会を行うほか、社会問題等を学びます。訪問、交流会を希望される方、同行も若干名可能ですのでご連絡下さい。コースが決定しましたら、訪問地近辺の皆様にご案内いたします。

時期：'93年11月中旬～末
予定コース(車で参ります)
神戸-東京-千葉-神奈川-山梨-静岡-愛知-和歌山-神戸

訪問者：第11期研修生4名、職員
内容：研修生の話、現地のスライドを用いた交流会、研修生に参考になる見学、宿泊等お願いします。

〈お正月とクリスマスは やっぱりタイ〉

年末年始といえタイのツアー。今年も昨年に引き続き、域内農民交流を含めて北のカレンの村と東北の村を訪ねます。夏のソディーツアーを受けて、カレンの村では布の染めも予定しています。

日 程 93年12月23日～94年1月2日
コース 大阪-チェンマイ-北タイ-カレンの村-東北タイ-バンコク-大阪
費用 約18万円 定員 14名

帰国研修生コマ、ウィラト、プリチャー、ワラヤ、サンコム、サウェーさんに会い、村の生活を体験します。

〈ワン・ワールド・フェスティバル'93 大阪で開催〉

10月6日の「国際協力の日」を記念し、大阪を中心とした関西一円において国際協力に携わっている行政、企業、市民団体が力を合わせて上記フェスティバルを開催。市民一人ひとりが交流の輪に参加し、国際協力の大切さを認識、世界の人々と共に生きるためのきっかけとなることを願っています。ぜひ、秋の1日をフェスティバルで!

日時：1993年10月17日 10時-16時
場所：大阪城公園 太陽の広場
内容：トーク&パフォーマンス、パネル展示
民族料理の模擬店、第三世界ショップほか
国際先住民族年記念企画もあり
問合せ先：大阪国際交流団体協議会内
事務局 06-773-0256

〈今井理事長に神戸新聞平和賞 岩村理事にマグサイサイ賞〉

地域社会に貢献した人々に贈られる第47回神戸新聞平和賞に理事長の今井鎮雄氏が選ばれ、5月26日表彰式がありました。

また、アジアのノーベル賞といわれるフィリピンのマグサイサイ賞の国際理解部門を理事の岩村昇博士が受賞、8月31日マニラでの受賞式に出席しました。

○月×日のPHD協会

PHD協会の活動やイベントに関する情報です。

総主事 草地 恒例の夏期出張。去年の長期3カ月に及ばないが、それでもドイツ、タイに始まって南太平洋へと続く。7月、8月とも1週間ほどの日本滞在。事務所の夏を2週間で済ます人。

主任主事 藤野 海外研修で英国滞在中。大手NGO、OXFAMを訪ね、職員数500人の規模にびっくり。むこうもたった6人でやってるPHDの仕事の範囲の広さにびっくり。(この項英国より)

主事補 小松 突然首がまわらなくなる事態発生。接骨院を3つはしごした結果結局総主事ご推薦の所に落ち着く。仕事の上でも、プライベートの面でも、総主事への道をひた走る?

主事補 吉岡 小・中・高生よりも大人の参加者が目立った草生塾、その中でも人一倍研修生と一緒に楽しんだビルマの蹴まりで、サッカーできたえた見事な足さばきをみせる。

主事補 渡辺 2年目に入り今年も、第7期関西NGO大学の運営委員となる。「食と農」というテーマでPHDネットワークより講師を出すことに。一時頭も丸めて気合い入れ、その姿に会いに来て。

囑託 柳下 2度目の草生塾参加となった今年も台所から離れられず。炊飯を習うも火吹きでボランティアにかなわずリタイア。参加者の子どもが捕まえたイモリの見張り番となる。

ボランティアの今出くん、日米学生会議のボランティアフォーラムに発表者で参加。ボランティア論を一席ぶつ。



編 集 後 記

「井の中の蛙」である私は、定年を目前に控えて、この世界の外に出た時、果たしてその環境の中に順応することが出来るか…と不安に思いました。時々覗くPHDの事務所の職員の方、研修生、集って来る人達と忌憚なく円満に交わり活動出来るか、否か、自分探しの旅をする積もりで週一回ボランティアを始めました。

広いとは決して言えない事務所には、遠距離をもいとわず、また学校の、会社の帰

路に、休日にと、老若男女が三々五々集まり、実に明るく時の情報を交換しながらその時々の仕事进行处理してゆきます。

来日した研修生と言葉も充分に通じない頃から交流を始め、各々の国の文化、生活習慣の異なるところを認識したり、帰国間近には、研修生の目に映った日本の姿を聴かせて貰います。居ながらの国際交流、来日早々のヴァナさん、人懐こく両手を胸のところで合わせて挨拶、私も思わず合掌、私はアジア人としみじみ感じました。

PHDを通じて、著しく経済成長をし高学歴化した日本が失った事象が見える想いが

します。次代を担う若者に何を伝えて行くのか…と。

今春兵庫の但馬を訪ねました。カレンの人々の布や、農業が取持つ縁です。アジアを仲介に町と農漁村との密度の濃い交流はPHDの温かい想いです。「井の中の蛙」は少しずつ視野が拡がりつつあります。互いに異なることを充分認識しながら、みんな仲良く「地球みな家族」を目指し、あなたへレターを送ります。

Egg

〈編集メンバー〉

荒木琢磨、上原真理、江草マサ子、鬼塚二三子、柿原登志夫、福井伸治、松谷聡美、山下智子、山田晃三

新規会員・寄付者ご芳名は、
個人情報保護のため
掲載しておりません。